

# 平成 26 年度 地球環境研究論文（旧 A 論文） 審査・査読要領

土木学会 地球環境委員会 論文シンポジウム検討小委員会

- はじめに

投稿数の増加により、これまでの査読体制ではスケジュール管理が困難となってきた状況下、地球環境研究論文編集小委員会メンバーによる編集会議を開催し、スケジュールに沿った査読体制を確立した。

以下、今年度のスケジュールを事例として、審査・査読要領を示す。

● スケジュール

	編集小委員会幹事	編集担当者	査読者	著者
3/21				論文応募〆切
3/22～ 4/2	編集担当割り振り案			
4/3	第1回編集会議(1) ・編集方針の周知 ・編集担当者の決定	第1回編集会議(1) ・担当論文の決定 ・副査の導入可否		
4/3～ 4/14		・査読者選定、査読依頼	承認	
4週間(査読)				
5/12		査読結果集計	第1回査読〆切 (電子投稿システム)	
5/16	結果記入表の集計 (2)	結果記入表の提出(2)		
5/19	第2回編集会議(3) ・判定決定			
5/26ま で		著者への連絡(4)		
3週間(著者修正)				
6/16ま で				修正〆切
6/23ま で		必要な場合、再修正依頼(5)		
7/6まで	結果記入表の集計 (2)	結果記入表の提出(2)		再修正〆切
7/7の 週	第3回編集会議(6) ・最終判定 ・大会実行委員会に提出			
7/14	保留論文への打診 (7)	最終決定の連絡(8) ・研究報告(旧B論文) 投稿打診		保留論文制度活用、研究講演投稿判断
2週間(著者論文完成)				
7/28				最終原稿〆切
9/4～6	地球環境シンポジウム			

## (1) 第1回編集小委員会

- **スケジュールの確認**
  - 2回の判定会議の開催
- **担当論文の割り振り**
  - 3月末に編集小委員会幹事による各論文の「主査」候補を選定する。「主査」は、編集小委員会メンバーから選択する。取扱が難しいと判断される論文については、別途「副査」候補を選定する。「副査」は、編集小委員会メンバーから選定する。
- **編集方針の確認**
  - 編集方針としては、「査読の正常化」および採択率の向上を目指し、
    - 1) 欠点に対する減点ではなく、新たな情報に対する加点を重視した査読を実施すること
    - 2) 論文の評価はいずれ読者が下すものであって、査読者が下すものではないという基本的考え方に立ち返った審査（重大な疑義があった場合は、読者として討議を出すべきと考える）
    - 3) 「新規性」「有用性」を重視した加点。「カントリーレポート」のような当該地域での新規性や有用性についても尊重する。
    - 4) 原則6頁以内に研究の目的、方法、結果、考察等をまとめたシンポジウム論文であることに配慮した審査を基本的理念とする。
- **査読依頼**
  - 再度、土木学会論文集の「査読要項」を参照頂く。
  - 査読者は、土木学会論文集規程に基づき、主査、副査を含めて3名とする。原則、主査と副査も査読を行うこととし、副査を選定しない場合には2名、副査を設けた論文は1名の査読者を選定する。
  - 査読依頼時には、「記載にあたっての注意および文例」の「A. 査読依頼時のコメント」を参考とする。
  - 査読者が決定し、原則として4週間の査読期間を設ける。1回目の査読締切りから2週間程度の調整期間を経て、5月中旬に第2回編集会議（第1回）を開催し、判定の確認を行う。

## (2) 第1回査読結果の決定

第1回査読結果を表を入力し幹事長・幹事長補佐へ提出（5月16日締切）

- 「研究論文査読結果記入表」に3名の査読者の判定、それらを総括した編集担当委員の総合判定および講評を記入する。英語論文の査読意見は原則英語とするが、筆頭著者が日本人の場合は日本語も可とする。
  - 査読者3名からの査読結果をもとに主査が掲載可否を判定する際には、以下の基準を原則とする。
    - 判定（5段階評価）で2点以下の査読者が0～1名の場合には、原則掲載可とする。
    - 2点以下の査読者が2名の場合には、原則は掲載不可とする。ただし主査の理由説明により可とする場合もある。
    - 査読者3名とも2点以下の場合には、原則掲載不可とする。
- ☆ 各査読者の判定（5段階評価）の点数の意味は以下の通り規定されているが、地球環境シン

ポジウム論文の査読においては、次のように読み替える。

- ◇ 5: 是非掲載すべき (a. 掲載可)
- ◇ 4: 掲載すべき (b. 修正依頼 Minor revision)
- ◇ 3: 掲載してもよい (c. 修正依頼 Major revision)
- ◇ 2: どちらかと言えば掲載すべきではない (d. 研究報告へ)
- ◇ 1: 掲載は適当ではない (e. 返却)

- 総合判定は、編集担当委員の判断により以下の通りとする。

土木学会投稿システム	地球環境シンポジウム	
掲載可決定通知	a	掲載可
修正依頼	b	修正依頼 Minor revision
	c	修正依頼 Major revision
返却	d	研究報告へ
	e	返却

- 「研究論文査読結果記入表」の記入例

論文番号	論文題目	判定1	判定2	判定3	総合判定	講評	審査結果
GS-xxxx	地球環境シンポジウム論文集の採択率の向上策	4	5	4	b	本論文は、…ことを目的として、…するものです。…と考えられますが、論文として掲載するには、…が求められます。講評および修正意見を十分に考慮して、適切な修正をお願いします。	
GS-xxxx	ジオエンジニアリングによる気候の制御	3	2	2	c	本論文は、…ことを目的として、…するものです。…と考えられますが、論文として掲載するには、…が求められます。講評および修正意見を十分に考慮して、適切な修正をお願いします。	
GS-xxxx	手賀沼における地球温暖化の影響	2	2	2	d	本論文は……を検討し、……これらの理由により、本論文は返却とさせていただきます。 なお、地球環境シンポジウムでは「研究報告」がございしますので、そちらへのご投稿も検討下さいませようようお願い申し上げます。	
GS-xxxx	放射能除去装置の開発	1	2	2	e	本論文は……を検討し、……これらの理由により、本論文は返却とさせていただきます。(地球環境シンポジウムでの発表が適切ではない場合)	

- 「b. c. 修正依頼」とした場合には、「講評」欄に「記載あたっての注意および文例」の「B. 修正依頼の講評」を参考に記入する。「a. 掲載」の場合は特にここに書く必要はない。
- 記入表の「総合判定」欄で「d 研究報告へ」もしくは「e 返却」とした場合には、「講評」欄に「記載あたっての注意および文例」の「C. 返却時の講評」を参考に記入する。

### (3) 第2回編集小委員会（判定確認・決定）

5/19に開催予定の第2回論文集小委員会にて審査結果を決定

- 小委員会にて「研究論文査読結果記入表」に基づき第1回査読結果について審議し、審査結果を決定する。また、講評についてもチェックを行う。
- 審査結果は、総合判定と同じ区分けとする。

### (4) 著者への連絡

編集担当委員より、著者へ連絡を行う。

- 修正依頼
  - チェック済の「研究論文査読結果記入表」の講評に従った連絡を行う。また、締め切りが3週間後である旨を連絡する。
- 返却プロセス
  - チェック済の「研究論文査読結果記入表」の講評に従った連絡を行う。原則、研究報告への投稿を依頼する。

### (5) 修正原稿の受け取り 6/16

- 再修正締め切りは、7/7とする。
- 再修正締め切りまでに約3週間であるため、再査読の時間をとることは難しい。編集担当委員の権限によって、(6/23)までに再修正依頼を行う。再修正の期間は2週間程度となる。
- 以下、参考スケジュールを示すが、編集担当委員の権限で短期間の再査読を依頼することも可。

6/16 修正締め切り

(1週間)

6/23 再修正依頼

(2週間)

7/7 再修正締め切り

### (6) 第3回編集小委員会（7/7の週、最終判定・プログラム案の作成）

- 1年目なので開催
- 最終判定およびプログラム案の作成を行う。
- 再査読の必要があるものは、時間切れと判断し、保留論文とする。

### (7) 「保留論文」の連絡

- 「D. 保留論文としての再査読依頼の講評」を参考に講評を書き、幹事から連絡を行う。
- 返却ではなく査読は継続するが、シンポジウムには間に合わないため、研究報告の申し込みが必要となる。
- 制度導入の提案
  - 限られた査読期間と審査・査読基準が明文化されていないことから、再査読後の再修正に対す

る最終判定の時間がとれずに、受理されない論文も少なくない。再修正が間に合わない場合に、当該年の地球環境研究論文集の掲載には間に合わないが、年度内までに審査を終えて受理する「保留論文」制度の導入を提案する。

- ▶ 当該年の地球環境シンポジウムでは研究報告（旧 B 論文）としてポスター発表を行い、再査読修正意見への参考にし、より良い論文とすることを狙いとする。年度内に採択された場合には、地球環境研究論文集の掲載は、次年度となるが、学位取得にもつながるほか、採択率が増え投稿者も増加する可能性がある。
  - ◇ ポスター発表では、主査、副査（当然ながら覆面）による討議を行い、文言だけでなくアドバイスを行うことも可能。
  - ◇ 論文集掲載後の討議を果たすため、次年度シンポジウムで講演を義務づける。

## (8) 登載可決定通知

- 「E. 登載可決定通知」を参考に、最終原稿の依頼を行う。

---

## ● 記載にあたっての注意および文例

### A. 査読依頼時のコメント

土木学会地球環境シンポジウム論文集の査読をお願い致します。

地球環境シンポジウム論文においては採択率が低いことが問題視されており、シンポジウム論文集編集小委員会においては、「査読の正常化」を目指し、基本的理念を以下のように設定しております。査読にあたってはご参考下さい。

- 1) 欠点に対する減点ではなく、新たな情報に対する加点を重視した査読を実施すること
- 2) 論文の評価はいずれ読者が下すものであって、査読者が下すものではないという基本的考え方に立ち返った審査（重大な疑義があった場合は、読者として討議を出すべき）
- 3) 「新規性」「有用性」を重視した加点。「カントリーレポート」のような当該地域での新規性や有用性についても尊重する。

4) 原則 6 頁以内に研究の目的、方法、結果、考察等をまとめたシンポジウム論文であることに配慮した  
審査

土木学会投稿システムにおける判断は 5 段階評価となっておりますが、地球環境委員会における評価との  
対応もご参考下さい。

- |                      |                        |
|----------------------|------------------------|
| 5: 是非登載すべき           | a: 登載可                 |
| 4: 登載すべき             | b: 修正依頼 Minor revision |
| 3: 登載してもよい           | c: 修正依頼 Major revision |
| 2: どちらかと言えば登載すべきではない | d: 研究報告（旧 B 論文）へ変更打診   |
| 1: 登載は適当ではない         | e: 返却                  |

## B. 修正依頼時の講評

査読者の講評等を参考にしながら作成した「研究論文査読結果記入表」の「講評」を書き込む。この講評は著者へ直接渡るため、適切な表現を心がける。査読者の講評を貼り付けるときは、そのまま貼り付けるだけでなく必要に応じて表現を修正し、査読者の講評の中に登載可否に関する表現があれば削除する。修正依頼の場合は、いずれも以下のような文章とし、最後の一文は必ず入れるものとする。

「本論文は、・・・ことを目的として、・・・するものです。・・・と考えられますが、論文として登載するには、・・・が求められます。講評および修正意見を十分に考慮して、適切な修正をお願いします。なお、通常のシステム上の締め切りとは異なり、3 週間後の 6/16 が締め切りとなりますので、ご注意下さい。」

## C. 返却時の講評

以下文例

<返却理由の例(ここは各論文の審査結果に応じて書き換えること)>本論文は・・・を検討し、・・・について定量的議論を試みた論文であり、テーマ設定には一定の重要性が認められます。しかし、実験方法や解析プロセスでの論理性に不備が認められました。また、既存の研究との違いについても、明確にされていないと考えられました。これらの理由により、本論文は返却とさせていただきます。

なお、地球環境シンポジウムでは「研究報告」がございしますので、是非そちらへのご投稿も検討下さいますようお願い申し上げます。締め切りは 6 月 0 日となっております。

末筆ながら、今後とも本委員会の活動に積極的にご参加・ご協力いただけますようお願い申し上げます。

(注) 返却と判断された論文の講評については、第 2 回編集会議において口頭でより詳細なご説明をお願いすることとします。

## D. 保留論文としての回答時の講評

査読意見に対して修正を頂きましたが、再査読、再修正が必要であると判断しました。

引き続き、論文審査は継続しますが、本年度の地球環境シンポジウムにはスケジュール的に間に合いません。

地球環境委員会では、保留論文制度を導入しました。

保留論文とする場合には、研究報告（旧 B 論文）の申し込みを行い、発表（口頭もしくはポスター）を行って下さい。

その上で、論文審査を継続し、今年度中に採否の決定を行います。採択された場合は、次年度の地球環境シンポジウム論文集に掲載されることとなります。また、土木学会の論文には討議が必要となりますので、来年度の地球環境シンポジウムにおける口頭発表も必要となります。

保留論文とは

近年、地球環境シンポジウムでは採択率が低いことが問題となっておりますが、審査期間の短さにも要因があると考えております。論文審査のスケジュール上、当該年の地球環境研究論文集の掲載には間に合わないが、時間をかけた再査読、再修正を行うことによって、年度内までに審査を終えて受理する「保留論文」制度の導入を行いました。

当該年の地球環境シンポジウムでは研究報告（旧 B 論文）として発表（口頭もしくはポスター）を行い、再査読修正意見への参考にし、より良い論文とすることを狙いとしています。

土木学会における論文には、討議が必要なため、来年度の地球環境シンポジウムにおける研究論文としての口頭発表が必要となります。

## E. 登載可決定通知

下記の最終原稿作成要領を参考に、7/28 までに高品質 PDF ファイルを審査システムから提出いただくとともに、版下原稿を、郵送頂きますよう、よろしくお願い致します。

----

「土木学会論文集 G 特集号（地球環境研究論文集）」 最終原稿作成要領の抜粋  
<http://www.jsce.or.jp/committee/global/ronbuntokoNEW.htm>

7. 提出方法：完成原稿の高品質 PDF ファイルを審査システムから提出いただくとともに、A4 上質紙へ鮮明に印刷した版下原稿 1 部およびコピー 2 部を郵送により下記の提出先へお送りください。（版下原稿は白黒印刷。郵送時に折り曲がることの無いように、厚紙等で保護してください。）

## 8. 原稿の送付先

〒160-0004 東京都新宿区四谷 1 丁目（外濠公園内）

土木学会地球環境委員会 論文集小委員会 宛

問い合わせ先

E-mail：sato@jsce.or.jp 土木学会研究事業課（担当者：佐藤）

TEL: 03-3355-3559

---